

大阪大学附属図書館石濱文庫所蔵
『manju gisun tacibure hacin -i bithe
(満州語教本)』について

On the Manchu Reading Textbook *manju gisun tacibure hacin -i bithe*
(*Manshugo kyohon*) in the Ishihama Collection,
Osaka University Library

松岡雄太
Yuta Matsuoka

This paper is a bibliographic consideration of newly found the Manchu Reading Textbook, *manju gisun tacibure hacin -i bithe* (*Manshugo kyohon*), in the Ishihama Collection, Osaka University Library. This paper mainly argued the following three points. 1) *Manshugo kyohon* was edited by WATANABE Shigetaro for the Manchu class at Osaka Foreign Language School. 2) *Manshugo kyohon* and *manju gisun tacibure tuktan bithe* (*Manshugo-o manabu shoho*) are in the relationship of the first volume and the second volume. 3) The original text of *Manshugo kyohon* is from Volume 2 onwards of the Manchu language textbook, *manju monggo nikan ilan acangga šu -i tacibure hacin -i bithe* (満蒙漢三文合璧教科書), compiled in China in 1909.

キーワード：

Ishihama Collection (石濱文庫), Manchu Textbook (満州語教材), Osaka Foreign Language School (大阪外国語学校), WATANABE Shigetaro (渡部薫太郎)

1. はじめに

本論文は、大阪大学附属図書館の石濱純太郎文庫（以下、石濱文庫）で新たに所蔵が確認された『manju gisun tacibure hacin -i bithe (満州語教本)』(以下、『教本』)なる文献の書誌学的な考察を目的とする¹⁾。この書物の名称であるが、同書は表紙に「manju gisun tacibure hacin -i bithe jai debtelin (満州語を教える件の書 第2巻)」と記載があるだけで(次頁の【写真1】)、「満州語教本」というのは、同書の中ほどに挟まれていた、以下の(1)に示す内容の目録

カード (のようなもの) にもとづく名称である。このカードの作成者がだれなのかは不明であるが、少なくとも満洲語を解する人物だったのだろう。

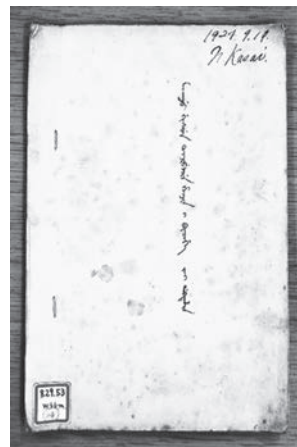
(1) 目録カード (のようなもの) の情報

829.53 [渡辺薫太郎]

W46m [満洲語教本]

大正13年

18丁 25cm ガリ版刷り



【写真1】

(1)のカードに示される書名以外の書誌情報のうち、まず、著者を渡辺 (正しくは渡部) 薫太郎²⁾と推定するのは、以下に詳述するように結論から言えば正しいのだが、実際は『教本』のどこにも著者名は記されていない。次に、刊行年を大正13年とするのは、『教本』の冒頭に、以下の(2)に示す内容の、凡例 (のようなもの) がふされており、その最後に識語があるので、そこから判断したものと思われる。最後に、(1)では丁数を18丁としているが、実際の丁数は21丁である。この齟齬はこのカードの作成者が『教本』の目次 (後述) にふされた丁数を鵜呑みにしたために生じたものと思われる。目次に示されている丁数は実際の丁数とは異なる。

(2) 凡例 (のようなもの)

- 本書ノ各科ハ支那出刊ノ教科書ヨリ蒐集シタル者ニシテ、漸々ト進歩シ初歩ニ比スレバ、大ニ文章ノ高尚ナルヲ覚ユ。
- 本書最終ノ一科ハ特ニローマ字ヲ以テ満文ヲ記セリ。学ブ者之ヲ満字ニ書き直シテ綴字ノ練習ヲ学フト同時ニ、本科ヲモ学ブ可シ。
- 本書ニ動詞ノ時ト法ノ変化ヲ示ス表ヲ附ス。本書ヲ誦読スル際本表ニ照ラシテ其変化ヲ学ブ可シ。
- 本書ニハヨリ多ク教材ヲ採録セントナシタルガ、暫ラク之ヲ別卷ニ譲リ、別卷ニハ專古典ノミヲ採録セン。
- 本卷ハ急々之ヲ採蒐セシヲ以テ、玉石混合ノ譏リヲ免カレズ。暫ラク之ヲ寛恕セヨ。

大正十三年八月十九日

(句読点は筆者による)

(2)の内容を見たとき、1項目から『教本』はその底本が「支那出刊ノ教科書」であること、4項目から著者は後日「古典ノミヲ採録」した「別卷」も予定したこと、5項目から『教本』の

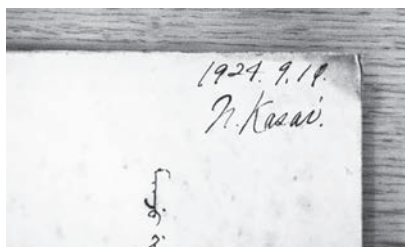
大阪大学附属図書館石濱文庫所蔵『manju gisun tacibure hacin -i bithe (満州語教本)』について (松岡)

「蒐集 (採蒐)」は「急々」であったことが分かる。なお、3項目には「本書ニ動詞ノ時ト法ノ変化ヲ示ス表ヲ附ス」とあるが、『教本』にそれらしい表はついていない。

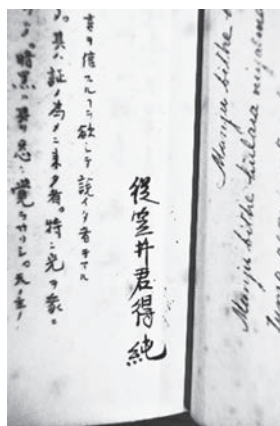
本論文では以下、上記の(2)にある各項が意味するところを明らかにしつつ、『教本』が、①大阪外国語学校で大正13(1924)年度の第2学期以降に渡部薫太郎が満州語を教える際、授業用に作成した教材であり、②表紙に「jai debtelin (第2巻)」とあることから恐らくは上下2巻本で本書は下巻にあたり、③その底本となったのは清末の中国で刊行された満州語学習書『滿蒙漢三文合璧教科書』であることの主に3点を主張する。

2. 石濱文庫に所蔵されるに至った背景³⁾

『教本』の表紙には書名の他に右肩に書き込みがある。その箇所を拡大したものが【写真2】だが、「1924.9.11. N. Kasai」と書かれてある。一方で、『教本』の最後の丁の中央付近には「後笠井君得純」なる書き込みもあり(【写真3】)⁴⁾、「Kasai」の漢字表記は「笠井」とであると推測される。この「N. Kasai」なる人物は、恐らくこの『教本』のもとの持ち主で、結論から言えば、『大阪外国語学校一覧』(以下、『一覧』)で蒙古語部第1回入学生13名(大正14(1925)年3月の卒業時には11名)の中に名前が確認される「笠井信夫」氏だと考えられる。



【写真2】



【写真3】

大阪外国語大学の前身にあたる大阪外国語学校は大正10(1921)年12月9日に設置、第1回の入学式は翌大正11(1922)年4月に挙行されている⁵⁾。支那語部、蒙古語部、馬來語部、印度語部、英語部、仏語部、独語部、露語部、西語部の九つの語部が置かれ、修業年限は3年、年3学期制であり、第1学期は4月1日、第2学期は9月10日、第3学期は翌年1月7日に授業が開始される。【写真2】の日付は1924.9.11となっているが、11の部分をよく見ると、もともと10とあったものを11に書き改めているように見える。もともと9.10と書かれていたと

すれば、これは大阪外国語学校の第2学期の授業開始日にあたり、偶然だとは思えない。

大阪外国語学校の蒙古語部は大正11年の第1期生入学後、大正12・13年度は入学募集がない⁶⁾。この理由に関しては、蒙古語部の教師陣の変遷からその内部事情を推し量ることができる。

【表1】 蒙古語部教師陣の変遷 (大正11年～大正14年)

年度	教授	助教授	傭外国人教師 (奏任取扱 外国人教師)	講師	主幹	学科主任
T11 (1922)	—	—	韓穆精阿	羽田亨	井上翠 (兼支那語)	井上翠 (兼支那語)
T12 (1923)	鴛淵一 (在外研究中)	—	韓穆精阿	羽田亨	井上翠 (兼支那語)	井上翠 (兼支那語)
T13 (1924)	鴛淵一 (在外研究中)	—	韓穆精阿	羽田亨	井上翠 (兼支那語)	井上翠 (兼支那語)
T14 (1925)	鴛淵一 (兼地理・歴史)	—	韓穆精阿	—	鴛淵一	鴛淵一

(『大阪外国語学校一覽』をもとに筆者作成)

大正11年のスタート時の教師はモンゴル人教師の韓穆精阿と、のちに『満和辞典』も編纂する著名な東洋史学者である羽田亨の二人体制である。だがこのうち当時の羽田亨の『一覽』に載っている肩書きは京都帝国大学の助教授(大正13年の『一覽』では教授)である。つまり、羽田は大阪外国語学校の専任教師ではなく出講、現在でいうところの非常勤講師のような立場だったのだろう。そのためか、蒙古語部の主幹および学科主任は支那語部教師の井上翠が兼任している。翌大正12年からは鴛淵一⁷⁾が教授に名を加えるが、その翌大正13年まで在外研究中とある。鴛淵一が蒙古語部で教鞭を執り始めるのは大正14年からであり、それも「地理・歴史」科目担当との兼任である。鴛淵一が在外研究から戻ったことによって大正14年から蒙古語部の主幹および学科主任は井上から鴛淵一に変わり、同時に講師だった羽田は蒙古語部の講師から「言語学講師」に担当科目が配置転換されている。つまり、大正12・13年度に蒙古語部の学生募集をしなかったのは鴛淵一が在外研究中、羽田亨は外部からの出講、専任教師は実質的にモンゴル人教師韓穆精阿の一人であり、授業運営体制が十全に整っていなかったためだと考えられる。

このことに伴って、蒙古語部の授業カリキュラムも最初の数年間は迷走し、何度も変更を余儀なくされている。

【表2】 蒙古語部における専修語学の教授時数 (大正11年～大正15年)

年度	専/兼	言語	第1学年	第2学年	第3学年
T11 (1922)	専	蒙古語	18	13	10
	兼	英語	3	—	—
	兼	支那語	—	3	3
	兼	満洲語	—	2	3
T12 (1923)	専	蒙古語	18	10	8
	兼	英語	3	—	—
	兼	支那語	—	8	5
	兼	満洲語	—	—	3
T13 (1924)	専	蒙古語	10	9	8
	兼	英語	3	—	—
	兼	支那語	8	7	6
	兼	満洲語	—	2	2
T14 (1925)	専	蒙古語	10	9	8
	兼	英語	3	—	—
	兼	支那語	8	7	6
	兼	満洲語	—	2	2
T15 (1926)	専	蒙古語	10	9	8
	兼	英語	3	—	—
	兼	支那語	7	6	5
	兼	満洲語	—	2	2

(『大阪外国語学校一覧』をもとに筆者作成。
網掛けの箇所は、当該年度の当該学年に在校生がいないことを意味する)

蒙古語部では専修言語の蒙古語に加え、兼修言語として英語、支那語、満洲語を履修することになっている。大正11年に入学した第1期生は、当初蒙古語を第1学年時に週18時間、第2学年時に週13時間、第3学年時に週10時間学ぶことになっていたが、実際は学年が進むにつれ、第2学年時に週10時間、第3学年時に週8時間と、履修時間は減少している。これは上述のとおり、蒙古語部の担当教師体制が十全でなかったためであろう。その分、当初第2、第3学年時に週3時間ずつ学ぶことになっていた支那語が、実際その学年に進級したときには、それぞれ週8時間、週6時間と増やされている。

さてここで本題の満洲語に目を向けると、大正11年度の『一覧』では、満洲語は第2学年時に週2時間、第3学年時に週3時間学ぶことになっている。ところが大正12年度の『一覧』を見ると、第2学年時に予定されていたはずの満洲語週2時間は削除されており、第3学年時に週3時間やるのみに変更されている。さらに大正13年度の『一覧』を見ると、第3学年に予定されていたその週3時間すらも、最終的に週2時間に減らされている(ちなみに大正13年度の『一覧』では第2学年の満洲語はまた週2時間に戻されているが、この年にこの学年の在校生はいないので、現実的にはその後を見すえた変更である。語学の教授時数は大正15年度以降固定

される)。要するに、第1期生は、最終的に第3学年時に週2時間満洲語を学ぶに留まったことが分かる。このような紆余曲折はあったが、大正14年度になってはじめて開講されたこの満洲語の授業を担当したのが渡部薫太郎である。渡部薫太郎は大正14年度から「満洲語講師」として『一覽』に名前が現れ、以後、昭和11(1936)年の7月22日、在職中に亡くなるまで引き続き教鞭を執っている⁸⁾。

満洲語の開講時期がなぜこのように遅れたのか、詳細な理由は分からない。大正11年当初から蒙古語部の学生に満洲語を履修させることは決まっていたが、なかなか担当教師が見つからなかった、あるいは満洲語の担当教師は渡部薫太郎と決まっていたものの、渡部の授業準備が2年目までに間に合わなかった、といったことが理由としては考えられる⁹⁾。いずれにせよ渡部は満洲語の授業準備に多くの時間を与えられていなかったのだろう。これが(2)の5項目にあった「蒐集(採蒐)」が「急々」であったという記述に現れているものと考え。また、結果的に蒙古語部における満洲語の授業が大正14年度からはじまったという事実は、笠井氏が本書の右肩に1924年9月11日と、おそらくは『教本』を入手した日であろう日付を記載していることとも付合する。以上のことを総合すると、『教本』は大阪外国語学校蒙古語部の満洲語の授業の教科書として渡部薫太郎が作成したものである蓋然性が極めて高いと言える。

では、なぜ『教本』は現在石濱文庫に所蔵されるに至ったのか。この点については次のような推論が成り立つ。石濱純太郎は大阪外国語学校が開校された際、その第1回入学生と同時期に、35歳で蒙古語部の選科生として入学し、大正11・12年度の2年間、笠井信夫らとともに、蒙古語を学んでいるのである。同校在籍中の大正12(1923)年にニコライ・ネフスキーとともに大阪東洋学会を作ったように、東洋諸言語に広く関心があった石濱は、カリキュラムにあった満洲語も本当は学ぼうとしていたのではないか¹⁰⁾。だが、満洲語の授業は予定されていた2年目には開講されず、何らかの理由によって石濱は授業が開講される3年目を待たずして大正13(1924)年3月に選科生を辞めている(吾妻 2019: 16)。よって石濱は恐らく教室で渡部薫太郎から直接的に満洲語を教わってはいない。第3学年になって満洲語を学んだ笠井信夫は、2年間同じ教室で蒙古語を学び、満洲語にも関心を示していただろう石濱に、もういらなくなったからと後日この教材を譲ったのではあるまいか¹¹⁾。あるいは逆に石濱から譲ってくれと言われたのかもしれない。

3. 内容と底本

次に、『教本』の内容と底本について考察する。まずは、『教本』の目次を示すと(3)のとおりである¹²⁾。

(3) 『満州語教本』の目次

tacikūi tangkin -i halhūn šolo	避暑休暇	一丁
afara baita	職業	一丁
aniya inenggi	元旦	二丁
amba aga	大雨	二丁
šun	太陽	三丁
wasington	ワシントン	四丁
dulimbai gurun	中国	四丁
beyebe iliburengge	身立	五丁
gūnin gingsire irgebun	詠懐詩	六丁
tīyan jin ba	天津	六丁
morin feksire arbun -i dengjan	走馬灯	七丁
duin yabun	四行	八丁
erileme guwendere jungken	時計	九丁
olhon de tebderengge	陸運	十丁
jasigan be ulara kuwecike	伝書鳩	十一丁
beneme bure amasi karularangge	投報	十二丁
jiyoo boo ji ii	塙保巳一	十六丁
jiowang ni ulha isus eyin hese	約翰福音	十七丁
yaya manju bithe hūlara niyalma de	満語学者ニ注意	十七丁

『教本』は満州語の読本である。その体裁は、(3)の目次にある表題ごとに、それぞれ比較的短めの満州語(満洲文字)による本文があり、その満洲語文のあとにまとめてその日本語訳(一部は漢語訳)が載っている。なお、最後の「約翰福音」と「満語学者ニ注意」の2課の満洲語本文は、満洲文字ではなく、現在でも満洲文字の転写に広く用いられる Møllendorff のやり方によるローマ字で書かれているが、この点は(2)の2項目に「本書最終ノ一科ハ特ニローマ字ヲ以テ満文ヲ記セリ。学ブ者之ヲ満字ニ書キ直シテ綴字ノ練習ヲ学フト同時ニ、本科ヲモ学ブ可シ」とあるとおり、ローマ字転写から満洲文字を復原するという学習目的のためであろう。

前章で見たように、『教本』の著者は渡部薫太郎と見て間違いない。渡部薫太郎の満洲語著作としては、従来、以下の(4)に挙げるものがよく知られている。だが、『教本』の内容は(4)の著作の内容といずれも合致しない。

(4) 渡部薫太郎の主な満洲語関連著作

『満語文典』(1918)*

『満洲語女真語と漢字音との関係』(1925) (『亜細亜研究』2)*

『満洲語図書目録』(1925) (『亜細亜研究』3)*

『(訂正) 満洲語文典』(1926)*

『満日対訳仏説阿弥陀経』(1928) (『亜細亜研究』7)*

『日満語類集語彙』(1929)

『満洲語会話読本』(1929)

『満洲語綴字全書』(1930) (『亜細亜研究』9)*

『満洲語俗語読本』(1930)

『新編金史名辞解』(1931)*

『増訂満洲語図書目録』(1932) (『亜細亜研究』3)*

『女真館来文通解』(1933) (『亜細亜研究』11)*

『女真語ノ新研究』(1935) (『亜細亜研究』12)*

(*は国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧可)

しかし、(4)の著作の内容を包括的に分析した上原久によれば、渡部薫太郎の著作と思われるものとして上記の他に『満洲語を学ぶ初歩』(以下、『初歩』)なる書物があるという。筆者は『初歩』を見ない。いくら検索してもどの大学の図書館にも所蔵が確認されない。現段階において『初歩』の内容は上原氏のみぞ知るものである。よって上原の指摘が『初歩』に関する情報源としては全てとなるが、それを整理すると(5)のとおりである。

(5) 『初歩』に関する情報 (上原 1966: 57-60)

(a) 表紙中央に「満洲語ヲ学ブ初歩」と表題があり、その右に「manju gisun tacibure tuktan bithe」(満洲語を学ぶ初めの本)とある。

(b) 刊行年月日も編著者もない。

(c) 巻頭に以下の文がある。

○本篇ハ大阪外国語学校蒙古語部ノ生徒ニ課セン為メニ編セル者ナリ。故ニ实用ヲ専ラトシ兼テ簡ヨリ繁ニ及サントスルヲ以テ、其ノ文章ハ極メテ卑近ナリ。且ツ卷末ハ必ず和文ノ直訳ヲ附シ自脩并ニ温習ニ便ニセリ。

○訳文ハ逐字訳ナリト雖モ、名詞ノ主格ニハ邦語ノハ、又ハガニ相当スルテニハナシ。又形容詞ノ現在ニハテニハナシ。故ニ山ハ高イ、高イ山ノ如キ場合ハ何等変化モナク、添附スル語モナシ。

○又名詞ノ第四格ハ第三格ニ通スルコトアリ。朝鮮語ノ夫ト同シ。

((c)中の句読点は筆者による)

(d) 精松源一氏によれば、これを教科書として満洲語を学んだ由。

- (e) 前篇 (第一から第十まで) と後篇 (第十一から第廿一まで) とでもいうべき 2 部分に分れる。
- (f) 共に先に満州文を一括して掲げ、後に纏めてその和文を示している。
- (g) 第十一以下は、第十四を除いて他はすべて「満蒙漢三文合璧教科書」(manju monggo nikan ilan acangga šu -i tacibure hacin -i bithe — 満蒙漢の三つを合した文の教科の書物 — 宣統元年 (1909) 序) の第一巻にあるものから転載している。
- (h) 最後に「動詞ノ変化」として arambi を例に、その活用語尾の各活用形を、その名称と和訳とを添えて示している。

まず、(5b) について、編著者が記されていない『初歩』を上原が渡部薫太郎の著作と判断したのは、(5c) の 1 項目に「本篇ハ大阪外国語学校蒙古語部ノ生徒ニ課セン為メニ編セル者ナリ」とあるからだろう。「大阪外国語学校蒙古語部ノ生徒」に満洲語を教えたのは渡部薫太郎以外にない。加えて、(5d) に名前が挙がっている精松源一¹³⁾は笠井信夫同様、大阪外国語学校蒙古語部の第 1 回入学生であり、その精松から直接の証言を得ているので間違いはあるまい。また(5b) について、上原は『初歩』の刊行年を大正 12 年頃と推定しているが、これは大正 11 年に入学した第 1 期生が当初満洲語を学ぶのはその翌年の第 2 学年時であり、そのために作られた教材だと判断したためであろう。だが、この推定にはやや疑問も残る。もし大正 12 年の早い時期に『初歩』ができあがっていたのならば、予定通り大正 12 年度から満洲語の授業を行なえたはずで、上述のとおり、実際の授業は大正 13 年度にはじまったのであるから、『初歩』ができあがったのは大正 12 年であればかなり遅い時期、ないしは大正 13 年に入ってから、恐らくは大正 13 年度の授業開始の直前にできあがったのではないかと筆者は推測する。

次に、(5f) も注目される。すなわち、『初歩』の体裁は、『教本』と全く同じなのである。このことから併せて(5g) に着目する。『初歩』の底本が『満蒙漢三文合璧教科書』(8 巻 10 冊、1909 年刊) であるならばと、調べてみると、『教本』の内容も実にそのほぼ全てが『満蒙漢三文合璧教科書』と一致するのである。その該当箇所を示すと(6) のとおりである。

(6) 『教本』と『満蒙漢三文合璧教科書』

taciküi tangkin -i halhün šolo	避暑休暇	不明
afara baita	職業	巻 2 第 47 課
aniya inenggi	元旦	巻 3 第 1 課
amba aga	大雨	巻 3 第 59 課
šun	太陽	巻 4 第 1 課
washington	ワシントン	巻 4 第 32 課
dulimbai gurun	中国	巻 4 第 23 課

beyebe iliburengge	身立	巻5 第1課
gūnin gingsire irgebun	詠懐詩	巻5 第44課
tiyan jin ba	天津	巻6 第45課
morin feksire arbun -i dengjan	走馬灯	巻7 第3課
duin yabun	四行	巻7 第20課
erileme guwendere jungken	時計	巻7 第5課
olhon de tebderengge	陸運	巻7 第25課
jasigan be ulara kuwecike	伝書鳩	巻7 第42課
beneme bure amasi karularangge	投報	巻7 第60課
jiyoo boo ji ii	塙保巳一	巻8 第24課
jiowang ni ulha isus eyin hese	約翰福音	不明
yaya manju bithe hūlara niyalma de	満語学者ニ注意	不明

(右側の巻と課は『満蒙漢三文合璧教科書』のもの)

(6)から分かるように、「避暑休暇」、「約翰福音」、「満語学者ニ注意」の3課を除き、『教本』の内容はほぼ全て『満蒙漢三文合璧教科書』の内容と一致する¹⁴⁾。この事実のもとに、『教本』の表紙に「jai debtelin (第2巻)」とある点に加え、(5)の残りの指摘を踏まえ、『初歩』と『教本』は実質的に2巻でひとつ、すなわち前者が上巻(第1巻)、後者が下巻(第2巻)のような関係にあったのだろうという結論が導き出される。すなわち、(5c)の巻頭文のつづきが(2)の凡例の文章であり、(5b)の刊行年月日の記載がない点は、そのつづきである(2)の末尾にまとめて記したためである。(2)の3項目に「本書ニ動詞ノ時ト法ノ変化ヲ示ス表ヲ附ス」とあっても実際『教本』にその表がない点は、(5h)にあるとおり、『初歩』につけられているためである。

4. 結論

本論文では石濱文庫で新たに所蔵が確認された『manju gisun tacibure hacin -i bithe (満州語教本)』なる本について書誌学的な考察を行なった。その結論は(7)のとおりである。

(7) 本論文の結論

『manju gisun tacibure hacin -i bithe (満州語教本)』は、

- (a) 大阪外国語学校蒙古語部での満洲語の授業用に渡部薫太郎が作成した教材である。
- (b) 『manju gisun tacibure tuktan bithe 満州語を学ぶ初歩』と合わせて上下2巻本であり、下巻にあたる。

大阪大学附属図書館石濱文庫所蔵『manju gisun tacibure hacin -i bithe (満州語教本)』について (松岡)

- (c) 『満蒙漢三文合璧教科書 (manju monggo nikan ilan acangga šu -i tacibure hacin -i bithe)』 (8巻10冊、1909年刊) の第2巻以降を底本とする。
- (d) 今のところ石濱文庫にのみ所蔵が確認される貴重な資料である。

このように考えると、笠井信夫氏が『教本』の右肩に1924.9.11と日付を残しておいてくれたおかげで、さらに『初歩』が大正13(1924)年度の第1学期に使用され、『教本』が引き続き第2学期と第3学期に使用されたのではないかという推論も可能になる。そして、この推論を後押しする内容が、『教本』の最初の課「避暑休暇」に見られる。

(8) 「避暑休暇」の日本語訳 (満洲語本文は省略)

学校ノ暑假。一ヶ月ニテ全ク満チタ。今日早く起き。新衣ヲ着テ。

学校ニ入レバ。先生我ニ新キ書物ヲ教ヘテ。我ニ告ケ曰ク。汝此ノ書ヲ書シタ。

第一巻ヨリハ。更ニ面白味アル哉ト言フ。

(6)で上述したように(8)の内容は『満蒙漢三文合璧教科書』に典拠を求められない。(8)の内容からして恐らく「避暑休暇」の課の本文は、渡部薫太郎自身の手による作文だったのであるまいか。夏休み明けの第2学期初回の授業で、教師から新しい教科書を手渡され、授業の説明を受ける学生たちが座った教室の場面が想起される。そのうえ、「第一巻ヨリハ。更ニ面白味アル哉」と先生が学生に言っている、といった内容¹⁵⁾は、ますます『初歩』が第1学期用、『教本』が第2学期以降用の教材であったことを示唆するとともに、渡部のユーモアが感じられる。

渡部薫太郎による大阪外国語学校での満洲語教育は、世界的に見て、学校教育機関で満洲語が教授された、先駆けとなる事例である¹⁶⁾。したがって、大阪外国語学校でどのような満洲語が教育されていたかを明らかにすることは、世界の満洲語教育・研究史において重要な位置づけにあり、『教本』はこうした点で貴重な資料と言える。

最後に、冒頭で触れたままになっていた、(2)の4項目「本書ニハヨリ多ク教材ヲ採録セントナシタルガ、暫ラク之ヲ別巻ニ譲リ、別巻ニハ専古典ノミヲ採録セン」とある「古典ノミヲ採録」した「別巻」であるが、これは渡部薫太郎がのちに著した、(4)にも挙げた『女真館来文通解』(1933)のことを指していた可能性がある¹⁷⁾。中国語(支那語)を満洲語と称することもあった大正・昭和初期において本家の満洲語自体、既にある意味では古典なのだが、ここでいうところの古典とは女真語を指していたのではないかと筆者は考えている。この時期にもし満洲語のみならず女真語までも学校教育で教えていたとすれば、恐らく世界的に見て例はない。このような点も含め、大阪外国語学校の満洲語教育に関する詳細な研究は今後の課題と言える。

注

- 1) 『教本』は大阪外国語大学附属図書館から1979年に発行された『大阪外国語大学所蔵 石濱文庫目録』に載っていない文献である。その存在をご教示くださった堤一昭先生(大阪大学人文学研究科教授)に感謝申し上げます。また、拙稿を事前に読んで貴重なコメントをくださった長田俊樹先生(総合地球環境学研究所名誉教授)にも心から感謝いたします。
- 2) 渡部薫太郎(1861-1936)の経歴などについては石濱(1936)、長田(2022d)、金斑実(2017)などが詳しい。また、その満洲語に関する業績については上原(1965, 1966)や岸田(2015)が言語学的な観点から考察している。
- 3) 第2章の内容は大正11(1922)年から昭和18(1943)年まで毎年刊行された『大阪外国語学校一覽』(現在で言うところの大学要覧のようなもの。国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧可)の内容に全的に基づいている。
- 4) 「後に笠井君からもらった。純(=石濱純太郎)」といった程度の意味かと思われる。ただ、大阪大学附属総合図書館事務職員の久保山氏によるとこの字体は石濱純太郎のものとは異なるという。
- 5) 大阪外国語学校に関する詳細は、大阪外国語大学70年史編集委員会(1992)の第1章と第2章が詳しい。
- 6) 募集は大正14年から再開される。なお、その後、昭和2(1927)年度も募集を停止している。このときの理由も恐らくは蒙古語部の内部事情、すなわち担当教師の問題によるものではなかったかと推測される。本文中の【表1】の続きが以下の【表3】である。『一覽』上で、鴛淵一は昭和3年10月1日付で退官したことになるが、昭和3年度の『一覽』に既にその名はないので、恐らくかなり早い段階から辞めることが決まっていたのだろう。このような事情が昭和2年度の蒙古語部の学生募集停止の背景にあったのではないかと思われる。

【表3】 蒙古語部教師陣の変遷(大正15年~昭和3年)

年度	教授	助教授	傭外国人教師	講師	主幹	学科主任
T15 (1926)	鴛淵一 (兼地理・歴史)	—	韓穆精阿	—	鴛淵一	鴛淵一
S2 (1927)	鴛淵一 (兼地理・歴史)	—	韓穆精阿	—	鴛淵一	鴛淵一
S3 (1928)	—	—	韓穆精阿	鈴江萬太郎	吉野美彌雄 (支那語)	鈴江萬太郎

- 7) 鴛淵一(1896-1983)は東京帝国大学文科大学史学科卒の東洋史学者。大阪外国語学校教授を退職後は、京都帝国大学文学部教授(嘱託)を挟み、昭和7(1932)年に広島文理科大学助教授となる。その後、同大学教授、広島大学、大阪市立大学などの教授を歴任(「鴛淵一博士略歴及主要著作目録」『人文研究』第7巻第8号, 1956)。没年はWeb NDL Authoritiesによる。
- 8) 渡部薫太郎の満洲語の授業に関しては、大阪外国語大学同窓会(1989: 97-98)に、蒙古語部第12期生の望月平八氏による回想の中で「一番印象に残る先生の思い出」として「(前略)……当時、国家的存在とされた満洲語の渡部薫太郎先生のいずれも今なお強く印象に残っている。とくに渡部薫太郎先生からは、講義のかたわら、若い頃から大陸を放浪した苦労話を聞かされたが、老齢にしてなおかつ烈々たる気魄を保持していた姿に強く打たれた」と述べられている箇所がある。第12期生は昭和8(1933)年度入学なので、この学年が第2学年に進級して渡部薫太郎の授業を受けたのは昭和9(1934)年、すなわち上の回想は渡部薫太郎が亡くなる2年前だったことになる。
- 9) 渡部(1934: 7-8)は、自身が大阪外国語学校に呼ばれた経緯について「偕て中目校長先生先年柯

太のオロッコ又ニリブ人(ウラル・アルタイ)の言語を調査し、各文典の著をなさいました関係で満洲語の智識を得られました不斗したる事で、語学上の事で私と交際を初めました同校長は蒙古語と満洲語の關係の深きを觀ぜられし結果満洲語を學校に加へられましたにつき世界に於て三校の一に加へられる様になりました」と述べている。この記述を素直に信じると、大阪外國語學校に満洲語の授業を加えたのは校長の中目覺の判断であり、渡部がその授業を担当することになったのはかねてから中目と交際があったからということになる。

- 10) いつから石濱純太郎自身が本格的に満洲語を学び、研究しはじめたのかは分からないが、石濱が1927年に設立した静安學社で石濱自身1938年2月に「満洲辭典考」という題目で講演をし(長田 2022b: 17)、1950年5月に石濱が中心となって設立された「ウラル・アルタイ学会」の、同年11月に行なわれた例会でも、石濱は「満洲語の研究」という演題で発表をしている(長田 2022c: 145)。
- 11) 渡部薫太郎が亡くなった際の追悼文である石濱(1936)には「先生の薫陶を受けたる新進の俊秀中には精松外語教授、笠井信夫君、原榮之助君、秋山某君などを數へ得るが、願はくば先生の足跡を省みて益々斯學(=満洲語学:筆者注)の闡明に従事してほしい」とあり、笠井信夫の名前が取り立てて挙げられてあることから、石濱が笠井に一目置いていたことが窺い知れる。また、長田(2022c: 134-138)によると、1941年に朝日新聞社から出版が企画され、石濱も編集に関わった『大東亞語学叢刊』の言語シリーズは、實際は『マレー語』(宮武正道著)と『樺太ギリヤーク語』(高橋盛孝著)の2冊が刊行されたに過ぎなかったが、執筆予定者の中で「安南語」の担当が笠井信夫になっている。これと同じ1941年に同じ朝日新聞社から企画され、翌1942年に原稿がそろったものの、最終的に1954年になって刊行されたという『世界の言語』(メイエ・コーアン監修)の翻訳出版において、南アジア諸語の担当者も笠井信夫である。笠井信夫氏は大阪外國語學校の蒙古語部を卒業後、どうやらモンゴル語から(東)南アジア言語に転向した模様である。なお、長田氏はこの企画に関わっていた者の数名は静安學社の社友であり、同時に大阪言語学会のメンバーでもあったのではないかと述べているが、昭和17(1942)年2月に石濱が創設した大阪言語学会の、昭和24年の『大阪言語学会要覽』の会員名簿に笠井信夫の名が見られ、その当時の肩書きは大阪工芸高校教授とある(長田 2021: 18)。加えて、長田俊樹先生から直接いただいたご教示によると、笠井信夫から石濱純太郎宛に送られた書簡も石濱文庫に残されているという。
- 12) 實際の『教本』は、目次の「ワシントン」と「中国」の課のあいだに「bethe bohire jobolon (纏足之害)」という課が入っている。このこともあってか、實際は「目次」の丁数とずれが生じている。なお、この「bethe bohire jobolon (纏足之害)」の課は『滿蒙漢三文合璧教科書』巻4の36課に典拠を求めることができる。
- 13) 注6)の【表3】の続きが【表4】である。鴛淵の後任は東京外國語學校でモンゴル語を学んだ鈴江萬太郎であったが、鈴江は東京住まいで2週間に一度大阪まで通っていたという(内田 2016: 52)。そのためか、主幹は支那語の吉野美彌雄が兼任している。だが鈴江萬太郎は赴任した翌年、昭和4年6月23日に亡くなり、立て続けに韓穆精阿も昭和4年8月31日付で退官する。この混乱を引き継いだのが大阪外國語學校蒙古語部第1回入学生の精松源一(1903-1993)である。精松は同校を卒業後、郷里の鹿児島で學校教員をしていたが、昭和5(1930)年から講師として母校に戻り、翌昭和6(1931)年に助教授、昭和11(1936)年に教授へと昇進しながら、モンゴル語を教える。戦後は引き続き大阪外國語大學のモンゴル語学科で長く教鞭を執った。

【表4】 蒙古語部教師陣の変遷 (昭和4年～昭和6年)

年度	教授	助教授	傭外国人教師	講師	主幹	学科主任
S4 (1929)	—	—	韓穆精阿	鈴江萬太郎	吉野美彌雄 (支那語)	鈴江萬太郎
S5 (1930)	—	—	福隆阿	精松源一	吉野美彌雄 (支那語)	精松源一
S6 (1931)	—	精松源一	福隆阿	—	精松源一	精松源一

- 14) 実際は「陸運」の課など、『満蒙漢三文合璧教科書』と内容が全く同じでない箇所もある。『教本』と『満蒙漢三文合璧教科書』の内容対照に関する点は別稿に譲る。
- 15) 日本の人物が『満蒙漢三文合璧教科書』に取り上げられているのが気に入ったのか、「塙保己一」の課の文章は、『教本』のみならず、その後大正15(1926)年に刊行した『満洲語文典』の末尾にも「満語読法」としてその冒頭が部分的に掲載されている。
- 16) 渡部(1928: 23)は「満洲語が一定形式の学校に於て正科として教授され始めたのは極く最近のことである。即ち今より四年前の大正十四年に大阪外国語学校に於て新に蒙古語の生徒に満洲語を併課したに創まる。垂て東京外国語学校に於ても蒙古語の生徒に、同じく満洲語を正科として課したが、今日までの所では世界を通じ満洲語を学校で学ばしたのは日本を措いて他にない。」と述べている。
- 17) 滋賀県立大学図書情報センターの精松源一文庫には渡部薫太郎の著作である『女真館来文通解』が所蔵されているが、筆者が現物を見たところ、授業で使われたような赤字の書き込みがある。『女真館来文通解』は昭和8(1933)年刊なので、仮に渡部がこの本を大阪外国語学校の授業で使っていたとしても、それは精松氏が学生であった時分のはずはない。ここからは筆者の想像だが、精松氏は注13)で述べたように1933年の時点ですでに母校の教師になっていたため、1933年以後渡部薫太郎が亡くなる1936年までの2・3年のどこかで、『女真館来文通解』を使って女真語を教える渡部の授業を学生に混じって聴いていたのではなかろうか。むしろ、精松氏が本書を使って独学で女真語を学ぼうとしていた可能性は残る。

参考文献

- 吾妻重二(2019)「石濱純太郎先生年譜略 補訂版」『東西学術研究と文化交渉——石濱純太郎没後50年記念国際シンポジウム論文集』(関西大学東西学術研究所研究叢刊59): 9-23、関西大学出版部
- 石濱純太郎(1936)「故渡部薫太郎先生」『東洋史研究』2-1: 92-94。(高田時雄編(2018)『石濱純太郎 續・東洋學の話<映日叢書 第四種>』、臨川書店に再録)
- 上原久(1965)「渡部薫太郎の満洲語学(1)」『埼玉大学紀要 人文科学篇』14: 1-17.
- 上原久(1966)「渡部薫太郎の満洲語学(2)」『埼玉大学紀要 人文科学篇』15: 1-60.
- 内田孝(2016)「討論 (のなかの発言)」『OUFC ブックレット』9: 43-56.
- 大阪外国語大学同窓会(1989)『大阪外国語大学70年史 資料集』、大阪外国語大学同窓会
- 大阪外国語大学70年史編集委員会(1992)『大阪外国語大学70年史』、大阪外国語大学70年史刊行会
- 長田俊樹(2021)「『大阪言語学会要覧』について——日本言語学史拾遺(1)——」『KOTONOHA』228: 1-19.
- 長田俊樹(2022a)「大阪言語学会会報について——日本言語学史拾遺(2)——」『KOTONOHA』230:

大阪大学附属図書館石濱文庫所蔵『manju gisun tacibure hacin -i bithe (満州語教本)』について (松岡)

1-32.

長田俊樹 (2022b) 「静安学社集会と講演について — 日本言語学史拾遺 (3) — 」『KOTONOHA』231: 1-30.

長田俊樹 (2022c) 「石濱シュレーに集う人々 — 四半世紀後に — 」『日本研究』64: 123-158.

長田俊樹 (2022d) 「宣教師的語学者・渡部薫太郎 — 石濱シュレーの人々 (1) — 」『KOTONOHA』233: 1-44.

岸田文隆 (2015) 「日本の満洲語学習のための工具書について」『第四届国際学術大会 — 満洲文化と満洲学』発表資料、高麗大学民族文化研究院

金斑実 (2017) 「満洲・間島における日本人 — 満洲語学者の渡部薫太郎を中心に — 」『韓国言語文化研究』25: 69-85.

渡部薫太郎 (1928) 「満洲民族とその言語」『満蒙』9-9(101): 17-27.

渡部薫太郎 (1934) 「満洲語漫談」『朔風』4: 1-8、満蒙研究会

資料

『大阪外国語学校一覧』大正 11 年度～昭和 18 年度

